

痛くないお産は母子双方にメリットも

欧米ではかなり普及しているものの、日本ではまだ少数派の無痛分娩。

無痛分娩に関する医療事故が相次いで報道されたため、

産婦人科と麻酔科の専門医による厚生労働省の研究班が立ち上げられ、2018年、安全性への提言が行われました。

安全性の向上のために、医療機関ではどのような取り組みがなされているのでしょうか。

無痛分娩のメリットとリスクなどについて、『24時間、麻酔科医による無痛分娩』が可能な体制を整える

医療法人財団足立病院（京都市）院長の澤田守男先生に聞きました。

どうして、無痛分娩に関しては、妊婦さんや
研究班が安全策を打ち出す

無痛分娩は、麻酔を用いて、経産分娩の痛みを和らげる分娩法です。一般的に「硬膜外麻酔」という麻酔法を使います。
硬膜外麻酔は背中の神経（脊髄）の近くの硬膜外腔（こうめいわいくう）というスペースに軟らかいカテーテル（管）を入れて麻酔薬を注入し、下半身の痛みを感じる神経を遮断する方法です。眠ってしまったではないので、会話は普通にできますし、新生児や授乳への影響はありません。フランスでは全分娩数の65.4%、イギリスは20.8%と世界的にも普及している分娩法です（左下図参照）。当院では全分娩の20～30%と増加しつつあります」と澤田先生は解説します。日本産婦人科医会の「分娩に関する調査」（2017年6月）によると、日本で2014～16年に行われた無痛分娩はお産全体の5.3%でした。

「日本では『お産は痛くて当たり前』といった古い概念が根強い面があります。しかし、無痛分娩ではお産の痛みが軽減されるので体力の回復が早く産後の育児が楽になります。メリットがあります」と澤田先生は話します。

妊婦さんの痛みを軽減することは、循環動態・血流の状態の安定をもたらします。また、精神的ストレスを回避する安全な分娩を行ふことができるようになります。そのため、妊娠高血圧症候群を併合する妊婦さん、さらに心臓や肺に持病がある妊婦さんにおいても、安心して経産分娩に臨みます。

いのちと
くらしの
Frontline

手厚いスタッフ体制と情報公開で 無痛分娩をより安心・安全に

お産の痛みを麻酔で軽減 赤ちゃんへの血流も改善

新生児の死亡率、または重度障害を負った事故が17年に相次いで発覚しました。これを受け、厚労省の研究班が、実態把握と安全な提供体制の構築に関する提言を行いました。

研究班の実態把握の結果、無痛分娩の妊娠婦死亡率は「麻酔を使わない一般的な分娩」と変わらないと分析されています。ただし前述の「分娩に関する調査」には、重篤な麻酔合併症が起つた事例が報告されています。

そのため、提言では、無痛分娩を行つ医療機関に、麻酔管理者の配置と責任の明確化（硬膜外麻酔開始30分間は集中的に産婦の全身状態とバイタルサインを観察）、麻酔担当医が緊急時に迅速に対応できる診療体制を取ることなどを求めました。また、「無痛分娩の診療実績」「標準的な方法」「急変時の体制」「麻酔担当医の講習会受講歴」などの情報をウェブサイトなどで公開することもあわせて提言しています。

自然な陣痛を待つ方法がある 予定を決める方法がある

「確かに無痛分娩では、麻酔によるトラブルが起きることがあります。でも、すぐに対処すれば重大な事態は避けられます。当院では麻酔科専門医が24時間体制で無痛分娩の麻酔に 対応しています。また、マンツーマンで助産師がついて、産婦さんの全身状態、血圧、心電図、胎児の心拍数などを観察しています。

さりとて、産婦人科医は麻酔科専門医や助産師とコミュニケーションをとつて、分娩管理を行います」と澤田先生は話します。

ただ、麻酔科医は全国的に不足しているため、24時間体制で無痛分娩が受けられる医療機関は限られます。そのため、分娩の日取りを前もって決め、子宮収縮分娩促進薬を使うことで、計画的に誘発無痛分娩（計画分娩）を行つ

施設が多いのが実情です。足立病院では希望者は計画分娩を行いますが、一般的には夜間や休日でも、自然陣痛が始まつて子宮口があらかじめ開いていた場合で、硬膜外麻酔を開始します。

なお、無痛分娩では一般的の分娩費用に加え、麻酔管理料が約20万円かかるので費用面で確認しましょう。ちなみに、足立病院ではその費用は薬剤費などを含めて約10万円程度となっています。

疑問・不安は遠慮なく確認 納得できる分娩施設選びを

「無痛分娩を検討する際には、24時間体制なのか、産婦（科医が複数いるのか、分娩の体制、緊急時の対応などを確認する）ことが重要です。わからないことや不安な点は医師や助産師に遠慮なく確認し、家族でよく話し合つて、無痛分娩を受けるかどうかを選択しましょう」と澤田先生はアドバイスします。

足立病院では、無痛分娩の説明会を定期的に開催しています。近くの分娩施設で、そいつた機会があれば参加し、メリット、デメリットを理解し、納得して選ぶことが大切です。

1996年京都府立医科大学卒業。国立がんセンター中央病院婦人科医員、京都府立医科大学大学院女性生殖医学科内講師などを経て、2019年1月より足立病院産婦人科部長。同年4月より現職。専門は、産婦人科一般、婦人科腫瘍、女性医学。安全なお産の体制づくり強化に力を入れる。



医療法人財団足立病院（京都市）

1902（明治35）年産婦人科専門病院として開設され、すべての女性の健康を支えることを目標にしている。約10年前から無痛分娩を開始し、2018年からは24時間麻酔科専門医が対応する体制を整備。17年にはお産の約1割だった無痛分娩が18年には2割、19年には3割程度まで増加しつつある。

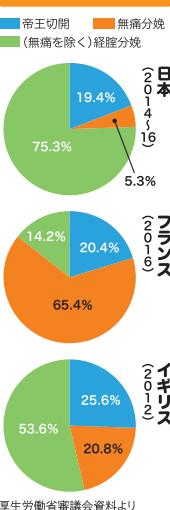


無痛分娩実施医療機関が探せるサイト

- 無痛分娩関係学会・団体連絡協議会（JALA）
- 「全国無痛分娩施設検索」
- <https://www.jalasite.org/area/>

各施設からの情報提供に基づいて掲載。分娩の体制や緊急時の対応などについては各施設に直接、問い合わせを。当サイトに掲載されている無痛分娩実施施設もある。

無痛分娩の実施率



一般的な「無痛分娩」の流れ

